

当院における妊孕性温存未受精卵子凍結保存の現状と
凍結・融解卵子を用いて妊娠が成立した 1 例

井谷 裕紀¹、水野 里志¹、藤岡 聡子¹、福田 愛作¹、森本 義晴²

¹IVF 大阪クリニック、²HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】社会的、医学的適応に関わらず、妊孕性温存のための卵子凍結では、1 人の児を得るためには 15 個程度の凍結卵子が必要であると米国生殖医学会のガイドラインに示されているが、原疾患治療が優先されるがん治療前の卵子凍結保存では多数の卵子獲得が困難なことが多い。本報告では、当院における医学的適応卵子凍結保存の現状と妊孕性温存凍結保存卵子を用い体外受精胚移植で妊娠に至った 1 例を紹介する。【現状】2006 年から 2020 年までに 24 例の医学的適応卵子凍結保存を実施した。原疾患治療までの平均採卵回数は 1.7 回、平均採卵数は 11.1 個、平均凍結卵数は 10.0 個であった。平均凍結保存期間は融解済症例で 50.5 カ月、保存中症例では 2021 年 6 月時点で 52.6 カ月であった。これまで凍結卵子を用い 2 例の体外受精を実施した。【症例】36 歳 1 妊 0 産。15 歳時に右大腿骨転子骨肉腫の既往。2015 年 12 月に左乳がんと診断され妊孕性温存のため直ぐに当院を受診。翌年 1 月レトロゾールによる調節卵巣刺激周期にて採卵を実施し 6 個の成熟卵子を凍結保存。採卵後直ぐに化学療法を開始し、同年 8 月化学療法後、左乳房切除及び放射線治療を行った。2020 年 4 月原疾患主治医より妊娠許可あり当院再受診。凍結卵子 6 個全て融解し生存卵子 6 個に顕微授精を実施。得られた 5 個の受精卵のうち分割期胚 2 個(Veeck 分類:Grade2,3)を自然排卵周期にて胚移植を行い妊娠が成立。37 週 6 日に帝王切開（骨肉腫術後の人工関節荷重制限のため）により 3106 g の健常男児を出産した。余剰胚は 2 個凍結保存中である。尚、治療成績を研究に用いる事に同意は得ている。【結論】がん患者の妊孕性温存治療の大原則は原疾患治療が優先されるため、十分な数の採卵数を得られない症例が多い。しかし、本報告のように 6 個の卵子であっても妊娠出産および余剰胚凍結まで可能となることもあるため、採卵数の多寡にかかわらず、可能な限りの妊孕性温存治療を実施することが重要である。